

第 63 回公開シンポジウム

## チンパンジーの子育てから学ぶ

- ◆プレゼンター 竹下 秀子  
滋賀県立大学人間文化学部教授 / 発達心理学・比較行動発達学
- ◆パネリスト 細辻 恵子  
甲南女子大学人間科学部文化社会学科教授 / 家族社会学
- ◆司 会 一色 伸夫  
甲南女子大学人間科学部総合子ども学科教授 / 子どもメディア学

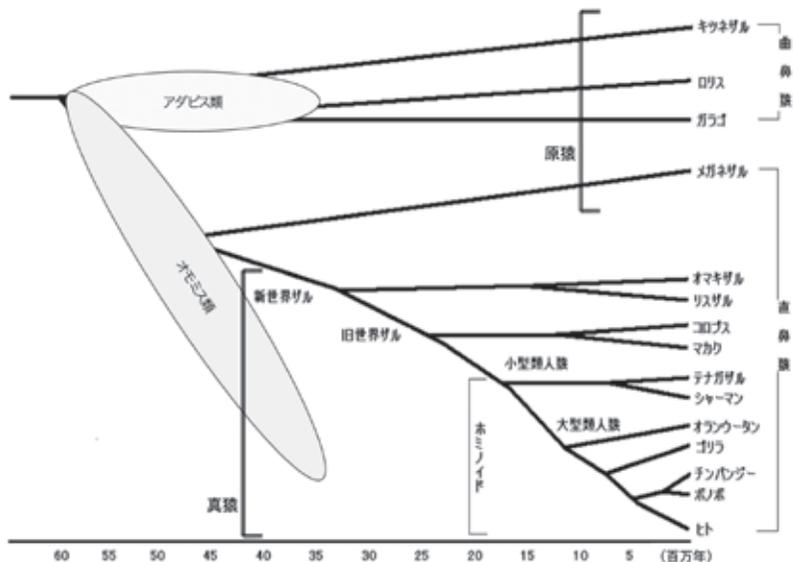
一色： それでは、第63回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「チンパンジーの子育てから学ぶ」をテーマで考えていきたいと思えます。人間とチンパンジーは同じ祖先から進化してきたことは、よくご存じのことだと思います。道具の使用や社会関係の豊かさなどよく似たところがたくさんあります。そういったことを竹下先生からお話していただきます。今回は、赤ちゃんが発達していく道筋やお母さんがどのように子育てをしていくのかを、チンパンジーと人間の赤ちゃんを比較して考えてみたいと思えます。母子の関わりの重要性や育て方のユニークさが、実はチンパンジーの子育てを見ることによって見えてくるのです。本日の基調講演のプレゼンターをしていただく先生は、滋賀県立大学の竹下先生です。先生は京都大学をご卒業され、現在は滋賀県立大学人間文化学部教授で、赤ちゃんのことを総合的にいろいろな角度から研究したり、赤ちゃんを育てている人と連携をしたり、日本赤ちゃん学会の評議員もされています。来年の春には、赤ちゃん学会の第9回学術集会の大会長もされる予定です。竹下先生は、京都大学霊長類研究所の共同利用研究員として霊長類の比較行動発達研究に従事されて、例えばオランダのバーガース動物園、ベルギーのプランケンデル動物園で集団飼育のチンパンジーとボノボの比較研究をされたりしています。現在、胎児期からの比較発達基礎研究と地域子育て支援を結ぶ、滋賀県立大学子どもの未来応援プロジェクトも展開されています。では、早速、竹下先生お願いします。

竹下： ただいまご紹介いただきました竹下秀子と申します。よろしく願いいたします。本日は、スライドを見ていただきながら、チンパンジーの子育てから学ぶというテーマでお話いたします。既にポスターで紹介くださっていますように、チンパンジーのお母さん、赤ちゃん、そして、人間のお母さん、赤ちゃん、それぞれに共通した、またそれぞれに違った面白い特徴があります。それらをご紹介しつつ、チンパンジーの子育てから学んで、何が、私たちが自分自身を理解する上で重要なポイントとして浮かび上がってくるのかを、皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

まず、チンパンジーとヒトはともに霊長類の一種です。現在地球上には、霊長類が約200種存在し、熱帯、亜熱帯を中心に幅広く分布しています。さまざまな種が生活しているわけですが、共通する特

徴は何でしょうか。ヒトやゴリラなどの一部の種を除くと木の上で生活していますね。これは、すぐに皆さんも思い浮かべていただくことだと思います。さらにまた重要な特徴は、群れを作って生活することです。社会生活、お互いのいろいろな関わりにおいて非常に複雑な関係を結び、その社会生活を行うために高度な知性を発達させている哺乳類の仲間、それが霊長類です。霊長類は木の上で生活するために必要な身体を持っています。木の幹を掴んだり離したり、そのようなことに役に立つ5本の指を備えた手足を持っています。そして、さらに、森の中でいろいろな美味しい食べ物を効率よく見つけるために視覚が非常によく発達しています。立体視、つまり3次元空間をしっかりと捉えることのできる視覚機能があります。そして、さまざまな木々の間から、美味しい木の実を見つけだすために必要な色覚、色を識別する視覚機能もあります。手指をしっかりと使うために、そして、いろいろなものを見分けるために、大きな脳が進化してきました。霊長類の特徴の何よりも重要な、そして、霊長類そのものを非常に明快に表現するものとして、アリソン・ジョリーという人は、絶え間なく進歩し続ける知性、これこそが私たち霊長類が共有する特徴であると言っています。今日の話では、この大きな脳を持っていることと関わるのですが、霊長類には長い寿命がある、つまり、長生きするというのをさらに重要な特徴として押さえておきたいと思います。長い寿命は、親として自分自身の子どもたちを養育する上で大きな精力を使う、ということにも繋がってきます。

現生霊長類と進化の系統概略図



ヒトとチンパンジーの話をする前提として、まず、私たちが霊長類全体の中でどのような位置にあるのかということをおこの図で押さえておきたいと思います(上図)。右端を現在とすると500万年前、1000万年前と遡って、どの辺りから私たちの祖先が他のグループと分かれてきたのかを示している図です。約6500万年前に原始霊長類と呼ばれるサルたちがこの地球上に存在するようになったそうです。その後、アダピス類、オモビス類と呼ばれるものが現れ、アダピス類から、現在、原猿と呼ばれて

いるグループのサルたちが進化してきました。そして、もう一つの大きなグループで真猿と呼ばれるサルたちがいるのですが、それはオモミス類から進化してきたようです。そのグループの中から、現在は、中南米に生きるオマキザル、リスザルなどの新世界ザルと呼ばれるグループが独自の進化の道を探っていきました。そしてさらに、アジア、アフリカ大陸に生きる、ニホンザルもそれに含まれるマカク属のサルたちがいます。コロボスと呼ばれているサルたちもいます。そのようなサルたちは旧世界ザルと呼ばれています。ホミノイドは、私たちヒトと、チンパンジー、ボノボ、ゴリラ、オランウータン、テナガザルを含むグループです。

ヒトとチンパンジーの関係をいいますと、約500万年前とも600万年前とも言われますが、その時期に両者は同じ生き物でした。同じ生き物であったものが、その内のある者はチンパンジーに向かって、そしてある者はヒトに向かって分かれていったわけです。この進化の系統樹の中で、ヒトと近縁のホミノイドの関係を探るとすれば、ヒトに最も近いのは、チンパンジー、ボノボのグループです。これに対して、チンパンジー、ボノボにとって最も近い進化の隣人、親戚はヒトなのです。いや、ゴリラでは?という理解をしている方も多いと思いますが、そうではありません。チンパンジーとボノボとヒトが、この地球上で一番近い仲間同士です。

先程、霊長類の特徴を簡単に述べましたが、その中で私が一番重要なものとして指摘した、長い寿命であるということ、それを端的に示しているのが、このような比較です。つまり、猫と、キツネザルと呼ばれる原猿と、新世界ザルの一種でオマキザルと、旧世界ザルの一種のベルベットモンキーと、私たちヒトやチンパンジーと同じホミノイドの仲間のテナガザルの5つの種を比較してみます。何が共通しているでしょうか。まず、哺乳類です。さらに踏み込んで何が共通しているか、大きさです。おおよそ3キロほどの体重の種をここに代表選手としてあげます。哺乳類の寿命は、体重の4分の1乗に比例するという法則があります。ですから、大きな体重のものは、長生きするのです。小さい体重のものの寿命は短い。霊長類は長生きしますといっても、霊長類にはいろいろな大きさのものがあるわけですから、3キロほどの体重の種を揃えて比較します。明らかに猫は、霊長類に比べて少ししか生きられません。テナガザルは、その3倍以上生きます。さらに次にヒトから近い関係の旧世界ザル、新世界ザルの順に寿命が長いということがあります。そして、もう一つ重要なことがあります。寿命全体に対して、成長期、つまり、胎児期、乳幼児期、子ども期の期間が長いということです。寿命の中で成長期間の占める割合が非常に大きい、これが霊長類全体の特徴であり、さらに私たちヒトに近いグループがその特徴を顕著に持っています。そこで、先程、代表選手になってくれたテナガザルの写真をご覧ください。テナガザルはアジアに住んでいます。これは、同じアジアに住んでいる大型類人猿のオランウータンです。アフリカ大陸に住んでいる大型類人猿がゴリラであり、チンパンジーでありボノボです。このチンパンジー、ボノボ、ゴリラ、オランウータン、テナガザル、そしてヒト、これがホミノイドというグループに属するサルたちです。

霊長類の中でも、ホミノイドたちは非常に長生きです。さらに体重を揃えて比較すると、成長期間の全生涯に占める割合が大きいです。その長い年月を、ホミノイドのお母さんたちは一人ひとりの子どもに養育という形で関わらないといけません。その関わり方がとても丁寧、そして深い愛情を注いで子育て

てをしているように見受けられるのです。このことを今日はしっかりと心に残していただきたいと思い、このような写真を持ってきました (de Waal, 1997)。これは何というホミノイドの一種でしょうか。オランウータンではなさそうです。チンパンジーです。しかし、チンパンジーではあるのですが、チンパンジーと言ってしまうと間違いでもあります。実は、チンパンジー属というグループに属しているボノボという種です。チンパンジー属には、もう一つ、チンパンジーという種があります。ボノボは、直立二足歩行が同じチンパンジー属のチンパンジー種よりも上手にできることが知られています。20～30メートルほどの距離を非常に美しい立ち姿で歩行します。そして、子どもを産むとこのような姿を見せることもあるという興味深い写真がこちらです (古市, 1999)。ボノボのお母さんです。お母さんは授乳をしなければいけないので食べ物が必要です。これはサトウキビだと思うのですが、このサトウキビを抱えると両手がふさがりますので、二足立ちをします。赤ちゃんがおんぶされています。その近くにいる、これは、もう一人の子どもです。たぶんお兄ちゃんが傍らにいます。お兄ちゃんが傍らにいて、赤ちゃんをおんぶしている場面です。こちらのお母さんはおんぶしている子どももいますが、けれどもお腹の方にしがみついてくる赤ちゃんも育てているようです。両手には一杯のサトウキビの束を抱えています。このような姿で、自転車に乗っておられるヒトのお母さんをよくお見かけします。まったく同じ姿です。お母さんは大変です。とてもよく似ていると思いませんか。

#### 〔ビデオ開始 (平田聡氏、林原類人猿研究センター提供) 〕

このビデオを注意深くご覧になってください。お母さんが何を子どもに止めておきなさいと言っているのかです。岡山県玉野市の林原類人猿研究センターのチンパンジーです。チンパンジーはナッツ割りをすることで有名ですが、これはナッツを割るための台です。ここには、ナッツを割るための台石とハンマー石を設置してあります。ハンマー石がばらまかれていると、それを投げたりすると危険なので、一つひとつに鎖をつけてあります。子どもは石も面白いのですが、鎖の方がさらに面白いようです。もう一度見てみましょう。お母さんはそれとなく気にしているのです。でも決してすぐに介入するわけではありません。でも、どうも鎖を子どもが触っているのが気になっています。石を触っている時は、かまわないみたいです。お母さんの目から見て、危なくないのでしょうか。けれども、鎖は子どもの首を締めつけてしまう可能性もあって危ないので、そういうものをお母さんは嫌います。そして、悲しいことが起こらないように、止めておきなさいと言って注意をするわけです。このように、子どもを見守りながら、そしてその危険を排除するような気配りをしながら、お母さんは子育てをしています。飼育下のチンパンジーですから、基本的には安全なのですが、でもお母さんは細やかな気配りをしていることがわかっていただけたと思います。ヒトのお母さんにとっても似ています。

では、子どもたちはどうなのか。赤ちゃんの方はどのぐらい似ているかというのを見てみましょう。この図をご覧ください (次頁図)。ヒトとチンパンジーの生後1か月の赤ちゃんです。見分けはつくけれども、よく似ています。これは、あおむけにしたところ、うつぶせにしたところですね。ヒトもチンパンジーもあおむけにした時に、ごろんと寝返るわけではありません。うつぶせにしても、すくっと四足で立って、歩き出すわけではありません。つまりとても未熟。身体を支えたり、身体を動かすことに関して、非

常に未熟な状態でヒトの赤ちゃんも生まれてくるし、チンパンジーの赤ちゃんも生まれてきます。このことが、共通しています。



サルだから、運動機能が発達して生まれてくると考える方も多いかもしれませんが、そうではなく、チンパンジーの赤ちゃんはヒトの赤ちゃんと同じぐらい未熟な状態で生まれてきます。その様子を姿勢反応で比べてみるすることができます。これはヒトの赤ちゃんですが、いろいろな姿勢にすると、この不安定な状態に抵抗しようと、その時の運動機能の最大の力を発揮して、赤ちゃんはいろいろな腕や脚の動き、身体全体の動きを示してきます。その様子から、その時々々の姿勢運動機能がどの程度発達しているのかを評価する指標として姿勢反応検査があります。これは3週齢の赤ちゃんですが、こうされても、腕は肘の部分で屈曲したまま、つまり、姿勢の不安定さから脱するような効果的な動きができません。これが新生児期の特徴なのです。それが徐々に、空中にあってもその身体を何とか持ち直そうとするし、そして、床の近くまで降ろされて身体を支えられた時には、腕を伸ばして自分の身体を支えようとするようになります。これが4～5か月ごろに始まる姿勢反応の特徴です。さらに7～8か月ぐらいには、腕も脚も伸展していろいろな姿勢にさせられて不安定な自分の身体を支えようとします。姿勢反応にはいろいろな誘発手技がありますが、同じ時期では、どのやり方に対してもほぼ同じような特徴が出てきます。

#### 〔ビデオ開始（京都大学霊長類研究所提供）〕

これは、京都大学霊長類研究所のチンパンジー、アイの息子のアムムです（次々頁図）。ちょうど1か月の時の姿勢反応を調べています。後ろにいるのは、有名なチンパンジーのアイです。でも今、麻酔をかけられているので眠っています。1か月健診をするためにこのように麻酔をかけて、赤ちゃんだけを私たちが触らせてもらっているわけです。1か月のアムムは、声は元気ですが「手も足も出ない」状態です。これが、3か月になると、益々声は元気になり、腕がすつと伸びました。これが6か月です。脚

がこんなにすっと伸びている様子、美しく伸びています。そして、ここでは、腕も脚も伸びて身体を支える、こんなにきれいな姿勢運動機能の発達があります。腕も脚も力強く伸びて、身体を支えようとします。ところが、この6か月の段階では、二足で立たせて、前の方に傾ける、このようなことをしても、反対側の足が上がるだけで、9か月にみられるようなさっと斜め前に反対側の足を踏み出して自分の身体を支えるという動きはありません。これは9か月です。身体全体がしなやかになっています。ということで、姿勢反応を見てもヒトとチンパンジーの間に生後1年間を通じて、共通した行動が見いだせません。つまり身体を支える能力において、チンパンジーも決して高い能力を持って生まれてくるわけではない。生後の一定期間の間にゆっくりと発達して、自分自身の身体を支えたり移動運動したりする力が発達してくるわけです。ヒトと同じなのです。

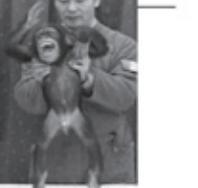
今度は、お母さんのとの関係において、非常に重要な、表情コミュニケーションの基盤となる能力について比べてみましょう。新生児微笑です。ご存じでしょうか。

#### 〔ビデオ開始（水野友有氏、京都大学霊長類研究所提供）〕

竹下：非常にほのかな笑みが見られました。生後1週間ぐらいから、赤ちゃんは頻繁に笑います。まどろんでいる時に、ニコッと笑顔が出ます。お母さんの顔を見て笑うわけではありません。自分から何かを発信しようとして笑うわけではないのです。睡眠に入る前、目覚める前、そのような時の生理的な状態の反映としてこのような新生児微笑が出るようです（次々頁図）。これを、2000年に生まれた霊長類研究所のチンパンジーたちの赤ちゃんを観察していた水野友有さん（現中部学院大学）が発見しました。もう一度ご覧ください。

ニコッと口元がゆがんだと思います。これはお母さんの胸です。そして、これはお母さんの手です。お母さんは寝ている時も、寝ている赤ちゃんの背中を手で支えています。そのお母さんの胸の上で、手の平で支えられて、赤ちゃんは眠りながら、ヒトと同じ新生児微笑をしました。他のチンパンジーの赤ちゃんでももっと明快な新生児微笑が観察されています。ヒトのお母さんにとっては非常に嬉しい笑顔を赤ちゃんが見せてくれることにおいて、チンパンジーはヒトと共通しています。

チンパンジー・アユムの姿勢反応の発達

	第1段階 前肢・後肢屈曲	第2段階 前肢伸展・ 後肢屈曲	第3段階 前肢・後肢伸展	第4段階 前肢・後肢伸展と 後肢の踏み出し
実施齢	1か月(4週)	2か月(8週)	6か月(26週)	9か月(40週)
試行名				
トラクション試行				
アキシラール試行				
ポイタ試行				
コリス水平試行				
コリス垂直試行				
ホッピング試行				

(竹下秀子・水野友有・松沢哲郎撮影、京都大学霊長類研究所提供)



**チンパンジーの新生児微笑**  
(水野友有撮影、  
京都大学霊長類研究所提供)

もう一つ、新生児模倣という現象もヒトではずっと以前から有名でした。大人が舌を出すと、見ていた赤ちゃんは同じように舌を突き出します。大きな口を開けると、同じように口を開けます。そして、さらに唇を突き出します。こんないろいろな表情をモデルに対応してヒトの赤ちゃんは見せることができるのです。こんなことができるのはさすがにヒトだということで、ヒトの赤ちゃんの有能性の証拠の一つとして注目されてきたのですが、チンパンジーの赤ちゃんも同じように、ヒトのモデルがこのような表情をみせると、それに対応して舌を突き出し、口を開け、そして唇を突き出します。これが明和政子さん（現京都大学大学院教育学研究科）らの研究によって確認されたのです。

新生児微笑、新生児模倣など、ヒトの赤ちゃん特有だと思われていた行動がチンパンジーたちにも見られました。対面コミュニケーション、顔と顔とを合わせて、母子がやりとりする、そのために基礎となるような力をもしかしたらチンパンジーの赤ちゃんは持って生まれてくるのかもしれませんが。そのような赤ちゃんに対して、お母さんがどのように振る舞うのでしょうか。ではビデオをご覧ください。

**〔ビデオ開始（中村美穂氏、アニカプロダクション提供）〕**

**ナレーション：**これは、アユムが生後40日後に撮影された映像です。まだ小さいので、高い高いをできないアユムをアイはおむけに寝かせ、くすぐってあやしています。アユムの口が開きました。笑顔です。眠りの中の新生児微笑は段々と消えていき、変わりに目覚めている時に親にあやされてこうした表情を見せるようになります。ヒトの場合、母親はこの笑顔を見て、子どもへの愛情を一層深めるといいます。

生後2か月半、松沢さんが手であやしても笑いを返すようになります。そして3か月が過ぎるころ、何にでも笑いかける時期がやってきます。身近な人の顔を覚えているか調べるために松沢さんの写真を見せると、満面の笑顔です。

竹下：このように笑顔で交流するということが始まります。生後2か月を過ぎると、新生児微笑は消えますが、社会的微笑という形で相手の反応によって自分が笑顔を返すというコミュニケーションができるようになります。

〔ビデオ開始（中村美穂氏、アニカプロダクション提供）〕

ナレーション：学習以外の時間、アイは緑のまぶしい庭で過ごします。街を見渡す塔のてっぺんでアユムをあやして過ごすのが、この頃のアイの日課でした。アイがアユムの手を持って持ち上げました。人間の子どものも大好きな高い高いです。チンパンジーもやるのですね。アイは目の前にあるアユムの顔を優しく見つめます。見つめ合うことで、母と子の絆は一層深まり、子どもは自然にさまざまな表情を学びとります。チンパンジーもまた、ヒトと同じように豊かな表情で気持ちを伝え合う生き物だったのです。社会生活を送るのに欠かせない表情によるコミュニケーション。それは、幼い日の母と子の見つめ合いから始まるのです。

竹下：赤ちゃんは、笑顔でコミュニケーションする基本的な能力を持って生まれ、そして、その能力を発達させていきます。その赤ちゃんに対してお母さんも対面でのコミュニケーションを導いてあげ、高い高いなどをして、いろいろとバリエーションを豊かにしながら、赤ちゃんと真正面から向かい合っ、関わりあって、子育てをしていきます。そのようなお母さんに子どもは付き従って生後数年間、毎日毎日を暮らします。

生活環境で出会う物とのかかわり  
—いつもおかあさんの傍らで



①並んで水飲み



（竹下秀子撮影、  
バーガース動物園提供）

②道具使用（水飲み）を注視



③違う道具で水飲み

何をするのもどこにいくのもお母さんと一緒です。水を飲んでいますが。これはオランダのアーネム市のバーガーズ動物園で撮影したのですが、お母さんが飲んでその横で、同じ格好をして口を尖らせて水を飲んでいますが（前頁①図）。その手は、しっかりとお母さんの背中を掴んでいます。このような姿、とてもかわいいですね。さらに、チンパンジーは道具を使います。これはお母さんがカップを使って水を飲んでいますが、そのカップを子どものチンパンジーはしっかり見えています（前頁②図）。カップを水につけるところをじっと見えています。そしてお母さんがカップを使って水を飲んでその先をじっとしっかり見えています。道具を使うお母さんの横に並んで、お母さんが道具を使っている姿を見て、お母さんの傍らでお母さんと同じことをして（前頁③図）、お母さんの暮らしぶりを自分のものとして身につけていくようになります。こういったプロセスも、ヒトに共通するものではないかと思えます。物をいろいろなふうにあつかって、それを道具として何かのために利用する。この力をチンパンジーもヒトと共有しています。

そこで、物をあつかう能力の発達をチンパンジーとヒト、さらにオランウータンも加えて比較してみたら、また興味深いことがわかってきます。まずは、物をとりにいくところです（下①図）。ヒトの赤ちゃんで、これは6～7か月ぐらいにしっかり出てくる力ですが、チンパンジーの赤ちゃんも4～5か月ぐらいには、そのような力が出てきます。そして、人差指の指先で、ものを探索する。そのようなとても器用で巧緻な行動で、指先を上手に使う力もついてきます（下②図）。チンパンジーのこの指先、小鈴に向かってきれいに伸びています。オランウータンの指先もそうです。さらに両手でものをあつかいます（下③図）。このような動作をヒトの赤ちゃんはします。片手で持ったものの一部分をもう一方の片手の指先で探る。ちょっと複雑な行動です。左右の手が違うことをしながら、しかもそれぞれの手の動きを協応させています。そして、チンパンジーの赤ちゃんも同じことができるし、オランウータンの赤ちゃんも同じことが

できる。つまり、生後の1年間は、いろいろな行動が、姿勢運動機能の発達においても、物をあつかうことにおいても非常に似通った形で出現するわけです。

ヒトもチンパンジーもオランウータンも同じように、赤ちゃんは手をじょうずに使えるようになっていく



①ガラガラをとりにいく



②人差指による小鈴への接近



③片手に持ったものをもう一方の手の示指先でつつく

（竹下秀子・松沢哲郎撮影、京都大学霊長類研究所提供）

ところが、こうしていろいろな行動を並べて、生まれた時から発達の様子を比較していくと、やはり違うことが見つかってきます。その中で非常に重要だと思うことは、あおむけの姿勢です。ヒトの赤ちゃんは生まれた時からずっとお母さんに抱かれているわけではありません。チンパンジーの場合は、生後2か月間ほどはお母さんが四六時中ずっと赤ちゃんを抱いています。ヒトの場合は、お母さんがずっと抱き続けるには少し大き過ぎるのです。また、ちょっとだけ、チンパンジーよりは未熟に生まれます。そのことも含めて、いろいろな理由があると思いますが、進化のある時点で、ヒトのお母さんは赤ちゃんを自分の傍らに置いて、抱かないけれども関わるという育児の仕方を始めたようです。その姿がこの写真に現われるような場面で観察されます。赤ちゃんはあおむけになっています。そして、ガラガラを持たせてあげましょう。持たせてあげるだけでもいいのですが、お母さんはこうやってガラガラを引っ張って赤ちゃんの気を惹いたり、ガラガラを引っ張りながらニコニコと赤ちゃんとコミュニケーションを交わしたりします。この赤ちゃんの表情を見てください。相手をしっかり見ています（下左図）。そして引っ張ってくれる人をしっかりと捉えて笑顔を示します（下右図）。このようなあおむけの姿勢で、物を自分であつかいつつ他者と関わる。こういった姿は、チンパンジーの親子の間には見られません。このような社会的な交渉をするまでに、まだまだ未熟な姿勢運動機能の発達段階であっても、ヒトの赤ちゃんはあおむけになると、物をあつかうことができるし、物がなければ自分の手をおもちゃとしてあつかうことができるように発達していくのです。そのような赤ちゃんが、一人でしっかり落ち着いたあおむけ姿勢で過ごす時間を持つことができるようになり、そこに、赤ちゃんのその姿に働きかける大人がいて、その大人の働きかけを、赤ちゃんはこんなに小さいのに、まだ何もできないのに、相手の気持ちを受けとめて、自ら笑顔で、視線で発信をしていくのです。

**ヒトは、生後4、5か月から、物を操作しつつ社会的に交渉する**



(竹下秀子・松沢哲郎撮影)

このような姿を示すヒトの赤ちゃんの、もう一つの大きな特徴は、提示操作の発達です。物同士を関係づけること、入れたり、渡したり、机のある場所に置いたり、そしてこのような積木を積むという行動、これをヒトの赤ちゃんは10か月ごろから行うようになります。1歳半ぐらいになると、高く高く積木を積み上げるしっかりとした行動をするようになります。

〔ビデオ開始（林美里氏、京都大学霊長類研究所提供）〕

竹下：これは林美里さん（京都大学霊長類研究所）が研究しているバルというチンパンジーが、初めて2歳7か月で積木を積み上げたシーンです。4個を続けて積み上げました。とても喜んではいません。ところが、少し気になることがあります。何でしょうか。お母さんです。微動だにしません。こんなに子どもが喜んでいのに、お母さんはまあいいかという感じです。

〔ビデオ開始（三和化学熊本霊長類パーク：現チンパンジー・サンクチュアリ・宇土提供）〕

竹下：ところで、チンパンジーの赤ちゃんでも、その姿を見て、声をかけてやると自分が積み上げたという喜びを他者にも分かち与えてくれることがわかっています。これは、熊本の三和化学霊長類パークで私が観察させてもらった4歳の双子のチンパンジーなのですが、積木を積み上げて喜んでいきます。手前の子は一人で黙々と続けますが、奥の子は積めたことをとても喜んでいきます。チンパンジーの場合、積木を積み上げる操作の出現が遅れます。生後1年間、両手で物を操作する行動の出現までの発達は、結構ヒトと似通った速さで進むのですが、積木を積み上げるという行動の出現は遅れて、2歳代から始まり、4歳ぐらいでしっかりとしたものになっていきます。そしてこのビデオのようにしっかりと積み上げることができるようになります。やはり積み上げると嬉しいのです。その気持ちを受け止めてあげる。「わあー」と言ってあげると抱きついてくるのです。でもチンパンジーのお母さんはわが子に対してそのような働きかけをせずに過ごします。

ヒトの赤ちゃんは常に、何かを自分が達成したらそれを見てくれている人がいることに気づきながら育つようです。いろいろなものに興味を持って、いろいろなものに手を出し、遊びます。同じ表情で同じものを見てくれている人がいる。家庭でもそうですし、保育所でもそうです。そういう人と赤ちゃんはやりとりをします（次頁右図）。指差しをして、「あー」という。それを見てくれている人がいるのだ、後ろを振り返ってやっぱり見てくれたね・・・という表情を返します。赤ちゃんは何か面白いものがありそうだな、というところを見ます。そしてこれは何？という感じで振り返ると、必ず応えてくれる人がいます。そして、相手の視線と気持ちを確認したら、また、相手のまなざしを背景に新しいものの探索に行くわけです。常に見守ってくれる人が後ろに控えています。その人は、普通はお母さん。でも、保育士さん、お父さん、それ以外の家族でもよいです（次頁左図）。

生後10か月ごろから始まる〔養育者：第2者〕との、  
「視線・指さし・対象操作」による〔物：第3者〕の共有



(竹下秀子・松沢哲郎撮影)



(竹下秀子撮影)

物や気持ちを分けていく、これがヒトの赤ちゃんの育ちに発達初期からあります。このようなところに着目すると、ヒトのお母さんとチンパンジーのお母さんの違いがはっきり見えてきます。

チンパンジーのお母さんは、危険から遠ざけようと思って一生懸命その子どもを見守っています。でも、その子どもが何を見ていて、何に興味があるかについては、あまり興味はないようです(次頁図)。この写真のチンパンジーのお母さんは、何かを見ています。多分、この子どももその同じ何かを見ているのですが、お母さんも一心に見ています。けれども、そのお母さんは、子どもが何を見ていて、何がわが子の気持ちをこんなに引きつけているのだろうかということには、注意を向けていないようです。ところが、このヒトのお母さんはどうでしょう。この赤ちゃんは、嬉しい、何かを見ています。喜んでいます。その気持ちを汲んでこそ出てくるお母さんのこの笑顔です。その辺りがヒトのお母さんの非常にユニークな豊かな心のありようを感じさせるところです。

## ヒトのお母さんは赤ちゃんの思いや注意を共有する



(飯田毅撮影)

〔ビデオ開始（上野有理氏、京都大学霊長類研究所・USP子育て応援ラボ「うみかぜ」提供）〕

チンパンジーのお母さんは、子どもに何を渡してあげようかということもあまり考えません。食べ物を分け与えることもあまりしません。子どものほうは非常に熱心に欲しがります。でもお母さんは平気です。上野有理さん（現滋賀県立大学）は母子間の食事のやりとりをチンパンジーとヒトで比較する研究をしました。これが9か月のアユムで、アイは子どもが欲しいという気持ちにあまり共感を示しませんでした。アユムの気持ちを共有して応えてはくれませんでした。2歳6か月の時点でも同様です。子どもの欲求はかなり強くなっています。けれども子どもがそれをお母さんに強く訴えかけてということをしていないのもチンパンジーの特徴です。お母さんのいらなくなったものを落とし与えられるような形の母子間での食べ物の移動がありますが、積極的にお母さんがあげることはほとんどありません。

ところがこのヒトの場合はどうでしょうか。お母さんには、絶対に赤ちゃんの方に何も反応しないでくださいと1分間の実験をお願いしてあります。1分経過しました。とても強く要求し、声を出して要求し、泣き叫び、とヒトの場合は、お母さんに向かってしっかりと自己主張します。お母さんはそれを避けるのがとてもつらい。このような場面は普通ありえません。すぐに子どもの気持ちを汲んだ行動をしますね。だからたとえ実験とはいえ、それをしないでくださいというと、お母さんの非常につらい様子がよくわかりました。ヒトのお母さんは、常に「どうぞ」という形で、子どもに食べ物やおもちゃを渡し続けます。そしてヒトの赤ちゃんは、生まれたその直後から、それを日々受け取り続けます。そうして与えられていく中で、ヒトの子どもは、自分自身が要求できるのだとしっかりとわかって育ち、要求する自己、主張する自己を育てていくのでしょうか。

〔ビデオ開始（バーガース動物園提供）〕

ところが、チンパンジーの場合でも、与える行動が全くないわけではありません。ご覧になってください。これは、バーガース動物園で私が観察させてもらったチンパンジーですが、お母さんがスプーンをくわえて歩いています。道具使用の観察をするために、スプーンを何本も屋外飼育場に入れた日の

ことです。水辺にきたとき、このお母さんは、2本のスプーンを口にくわえていたのですが、その内の一方を自分の手にとり、もう一方を口渡するかのよう自分の口を赤ちゃんの方に向けて突き出しました。それを赤ちゃんの方は、手で受けとって、お母さんと同じように水飲みを始めました。このシーンをもう一度見て、実際にそうだったかということを確認してください。2本のスプーン、そして、1本を赤ちゃんに差し出すお母さんの口がぐっと突き出しました。明確にこの子どもに向けてスプーンを渡しています。そういう行動が何年間もその群れを観察してたった1回観察できました。それでも、このような行動を起こす力をこのお母さんが蓄えていたことに注目したいと思います。20年、30年と生きてきて、子どもを産み、4～5年をかけて一人の子どもを育てます。何人かの子どもをそれぞれに4～5年かけて育てて、そのうえで初めて出てくる行動としてこの分かち与える行動があり、観察できたのです。

ヒトとチンパンジーの赤ちゃんの育ち方を比べてみると、よく似た行動がほぼ似た順序で出現してきます。けれども、いろいろなことを総合的に比較してみると大きな違いが浮かび上がってきます。ヒトの赤ちゃんは発達初期からおむけ姿勢の中で物を自由にあつかえる両手の力を身につけていくと同時に、その物を通じて、他者が関わる機会を頻繁に持つことができます。つまり、ヒトの赤ちゃんは発達の初期からいろいろな物を周囲の他者との関わりの中で与えられて、周囲の他者との関わりの中で物をあつかう能力を高めていきます。そのように何かを他者と共有する力を、ヒトの赤ちゃんは発達の初期、生後1年間の早い時期から身につけていきます。物をあつかう行動をお母さんと一緒にします。そして物に注意を向けるということも一緒にします。一緒にするんだ、一緒に何かに気持ちを向けるのだ、こういったことを通じて、相手のやっていること、相手の気持ちを理解していきます。そのことが十分に、最初の1年間を通じて育った後に、大切な言葉、たとえば「わんわん！」がでてくるのです。赤ちゃんの「わんわん！」に「わんわんだね」というお母さんの声の聴かれる関係があってこそ、あらかじめ築かれていてこそ、このような発話が出てくるのです。赤ちゃんの言葉は、お母さんとのコミュニケーションに必要なものとして獲得されて、使われていくのだらうと思います。これでプレゼンテーションを終了させていただきます。

**一色：**竹下先生ありがとうございました。この竹下先生のお話のヒトとチンパンジーの相違点を受けて、本学の細辻先生に文化社会学的な視点から見て、ヒトの赤ちゃんの親子を中心に話をいただきたいと思います。細辻先生も京都大学ご出身で、大学時代にサルの研究にも関心があって伊谷純一郎先生の授業に出ていらしたそうです。ではよろしく願います。

**細辻：**本学文化社会学科の細辻です。よろしく願います。竹下先生は発達心理学のご専門でいらっしゃるの、順を追っていろいろな観察結果からこのように変わっていくということをたくさん写真・ビデオで見せていただき、皆さんも時々可愛いとおっしゃっていたり、笑ったりされていましたが、私も写真やビデオのシーンを見ながら少し頬がゆるんでしまうというか、楽しませていただきました。昔からアイちゃんとその息子アユムの話は有名ですし、テレビなどでも松沢先生が愛情込めて育てられてきたのを

観てきました。先程、チンパンジーと一緒にボノボも出てきましたが、アメリカで育てられているボノボのカンジと妹のパンバニーシャのことを、テレビで観た時、英語ですが、1000語ほど聞き分けることができるということにびっくりしました。台所で、研究者で育ての親であるスー・サベージ・ランボーが料理をしている時に、お湯が沸いているお鍋にパスタが入れてあって、それを「かき混ぜて」と言ったら、普通動物は火を怖がるのですが、賢いカンジ君は棒のようなもので大きなお鍋の中をかき混ぜ始める。1000語ぐらいの言葉は聞き分け、絵文字みたいなものを指差して、ちゃんと考えていることを伝えることができる。そのような研究をテレビで観た時、驚きました。とにかく擬人化というか、人間と一緒にだと感じたことはずいぶん前からありましたが、竹下先生のお話から、いろいろな場面で人間と一緒にであると今お聞きして、まさにそうだと思います。

ヒトのお母さんとチンパンジーのお母さんが少し違うと指摘されたところは、積木をしている横で、チンパンジーは微動だにしない、見守っているけれども、それほど一緒になってやることはなかったということです。ヒトの場合は、お母さんも喜び、一緒になって分かち合うということで、同じことができるけれども、密度が濃いのがヒトであるということでした。15年、20年という長期間、子どもから青年期、そして大人という成長の途上でいろいろなことを吸収する期間は、もちろん、ヒトの方が長くなっていて、言葉も喋れるし、たくさんものを吸収できるという素地を持っていて、そのことが文明社会を作った人類、ヒトと、言葉を使うコミュニケーションをしない霊長類との違いかもしれませんが、とにかく、分かち合う、喜ぶといった様々な関わり合いというのが、ヒトはとても豊かであるということが改めてわかりました。チンパンジーとヒトを比べると同じ質のものが可能だけれども、量ということでは、ヒトの方が、とても多くの関わり合いをしているということが、比較の結果実感できました。愛着、愛情を持って育てるというのは、ある種、本能的に備わっているものという感じで理解をしてきたのですが、我々は本能よりも文化で生きている部分が多い。動物ももちろん文化を伝えていくので、動物の文化がないということではないし、霊長類が文化を持っていることを発見したのは、日本の霊長類学関係、自然人類学関係の研究者であって、世界に先駆けてそういうことを主張されたという実績があるのですが、私は、社会学の方でずっとやってきましたので、母性というものを本能と考えている部分に関しては、異論を唱える人たちが結構いることを見てきています。

お話が少し反れていくかもしれませんが、母親になれば子どもをかわいく思って、育てるということは自然にできると思ってしまいがちです。ところが、今日本でも注目されている虐待された子どもの話などを耳にする機会が増えました。前からありましたが、日本ではさほど表面には出て来なくて、アメリカの方が児童虐待に関しては前から問題視されていたのですが、日本もいろいろなことが表に出てきました。それは、ここ数十年の話ではなくて、歴史を遡ると、母親が子どもとコミュニケーションしつつ、自分の手で大事に育てるということではなかったというのが出てきます。大きな時代の流れでいえば、近代では少産少死で、少なく産んで、大事に育てる。そして死亡率もぐんと減りましたから、長寿になっています。昔は多産多死、たくさん産んで乳児死亡率、幼児死亡率が高く、早くに亡くなったりして、長生きする人は長生きするのだけれども、死亡率もけっこう高く、人口はそれほど急激に増えることもなくやってきた時代がありました。そのように大きな歴史的流れでみると、自分の手で子どもを育てるというよりも里子に出して、里親に育ててもらってまた手元に戻すとか、捨て子をしたり、教会で育ててもらおうと、教会の前に置き去りにする。最近、熊本県での試み

でもありますね。病院に「赤ちゃんポスト」を作って、どうしても育てられない人は、匿名でそこに置けば、子どもを育ててもらえるという試みに似た制度は、かつて、あちらこちらに設けられていました。逆に言うと、人類が、子どもを大事に育てるということに目覚めたのが、この何十年であって、近代からもっと遡って古い時代は、皆が皆そのようにしていたわけではなかったわけです。そう考えると、今の時代の方が、児童虐待はみられるのですが、一人ひとりが自分の子どもを自覚的に大事にするような時代になったかなと思うとともに、もっともっとチンパンジーの育て方から学ばないといけないのではないかという反省があるかと思います。このようなビデオを多くの人に観てもらって、自分の胸に手を置いて考えなければいけないのではないかと思います。なぜ、子どもに素直に向き合って、目を見つめあってスキンシップをしながら育てていくことができないのだろうか。ほとんどの人ができることではあるのですが、できないということもある、つまりそれを邪魔しているものは何なのか。自分の子どもがその人生を全うするのを、見守る、一人の人間として自分の生に満足するように生きていくことを応援してあげようと、後ろから見守るような立場で、子どもの成長につきあっていくことができれば、アイちゃんとアユム君と同じような形でいけるのではないかと思います。しかし、今の時代は競争社会です。自分の子どもをこのように育てたのだ、私が育てあげたのだという親の思いが強くて、それに子どもが潰されてしまいかねないようになっていきます。最近、「子どもが授かる」という言葉が無くなり、「子どもを作る」ということ、理想の子どもを作るというような違い、「授かる」と「作る」の違いですが、それが見られるようにも思いますし、本能の部分が少なくなって、逆に文化で様々な多様なものを作っていき能力の発達した人間の一つの側面かもしれませんが、親子関係のあり方に雑音が入ってきて、本来の自然であったらそうであるような関わり方が、雑音、雑念に惑わされて、違う方向に行っていることは残念であると思います。竹下先生のビデオにあったような素直な関わり方で、虚心に子どもを育てる、育つを見守るというような形で親と子がお互いに関われれば良い方向に行くのではないかと思います。少しまとまりがありませんでしたが、コメントとさせていただきます。

**一色：** どうもありがとうございました。竹下先生、細辻先生のお話しを受けて何かございませんか。

**竹下：** まず、子どもを産めばよいお母さんになれるかということ、必ずしもそうではないということです。これは、ヒトにおいて、まさに現代社会においてもそうですし、歴史的にもそうでした。そのことは、チンパンジーにおいても共通していると理解したほうがよいようです。つい最近も来日されていました、ジェーン・グドールさん、アフリカのタンザニア、ゴンベで野生チンパンジーを40年間に渡り観察されてきた方です。母子関係の緊密さに興味を持たれて熱心に母子の姿を追って来られたのですが、その中で、確かによいお母さんはいる、とおっしゃっています。彼女はよいお母さんの条件として、いくつか挙げておられて、今ビデオで見させていただきましたが、まず、受容的であること、そして応答的であることです。受け入れてよく応えてやって、そして保護的であること、けれどもそれを押しつけるわけではない。さらに加えて遊び上手であることを指摘されています。そのようなお母さんは上手に子どもを育てられます。上手に子どもを育てるということはどういうことか、チンパンジーの場合、もしそれが女の子であれば、よいお母さんになるということです。そのようなお母さんの子育てが受け継がれていきます。ただ、実際にそうはうまくいかない、子育て下手のお母さんはチンパンジーに

もいるわけです。するとそれがまた受け継がれていくという様子をずっと観察されてきました。つまり、チンパンジーでさえと言うと彼らに失礼なのですが、いかに育てられたかということが、子育ての力を持った大人になるかどうかということに影響しているわけです。もちろん、授乳をすることが哺乳類の一番重要な特徴ですが、自然にその種にふさわしいような形で、授乳も含めた育児行動をどの個体もできるようになるかということ、多くの種でそうではありません。チンパンジーにおいてもそうではないですし、さらにヒトにおいてもさらにそうではないのです。それを補っていくのが、その種それなりに、上手に育てないお母さんをどんなふうをサポートしていくかという行動の進化です。チンパンジーのお母さんは、基本的には子どもを自分だけの力で育てます。けれども、ヒトの場合は、それをするには、あまりにもたいへんな子育てがお母さんに課せられてきました。これはヒトとなった時からそうなのです。独力で育てることの困難なお母さんに対して、ヒトという種は、その子育てを支える、援助する行動を種の特性として育んできたと考えられます。ですからその辺りを私たちはチンパンジーの子育てから学ぶこととして、今後一層大事に考えていく必要があるのではないかと思います。チンパンジーの子育てから学ぶという本日のタイトルですが、一人の子どもを大事に丁寧に育てるその姿には頭が下がります。と同時に、でも私たちは、彼らにはない、とてもユニークで豊かな子育てをしていて、そこに気がつくことが、チンパンジーの子育てから学ぶことではないかと思っております。その内の一つが、物を共有する、食べ物を共有する、そのお母さんの強く熱い姿勢であるということであつたし、さらに周囲の人間は、そうやって熱く、そして苦勞して子育てしているお母さんを支える。これは、チンパンジーの世界には、見られにくいことです。彼らは仲良く上手に社会生活していますが、一人の子どもを4～5年に渡って育てるのは、お母さんの独占的な役割、そのような様子が見えます。その辺り、つまり、私たちのユニークな育児のあり方は、彼らの生活を知ることによってこそ、多いに学べる場所であると思っています。

**一色：**今、竹下先生がおっしゃった2つ目の周りの人がそれをアシストする、その辺りについては、去年の子ども学講演会で、小林先生がご参加された時に、ドゥーラの問題を取り上げたのです。それは、ダナ・ラファエルが最初に言い出したことで、やはり介添え役のような人がいるとしないことによって全然違うということを指摘されたのですが、その部分は人間が知恵を出して創り出してきたのかと思っております。そこで、竹下先生にご質問があるのですが、チンパンジーにもいろいろなチンパンジーがいる、グドールさんでしたら、よいチンパンジーのお母さんの条件はこうだというお話がありましたが、やはりよいお母さんも普通のお母さんもチンパンジーの場合も、生まれついて遺伝的にそれができるというわけではなくて、多分、その周りにいる他のチンパンジーの子育てなどを見ながら、その中で、経験的に学んでいくものもあると思うのです。ところが、ヒトの子育てでいうと、最近はそのような機会が核家族になってありません。チンパンジーはどのように周りの環境を取り入れて、チンパンジーとしての子育てを学んでいるのか、いかがでしょうか。

**竹下：**チンパンジーは子育てを学びます。お母さんが子育てしている様子をお姉ちゃん、お兄ちゃんは近くで見られる機会を数年間持ちます。一人の赤ちゃんが生まれて育つのに4～5年かかります。そして、ようやく離乳ができて、離れるのですが、でもいきなり大人になるわけではなく、その後数年間、子ども期をお母さんの周囲で過ごします。先程の写真では、ボノボのお母さんが背中にお兄ちゃん、胸に赤ちゃんを抱いていましたが、

そのような形で過ごすこともあったりすると思います。つまり、弟や妹をお母さんが育てている様子を身近で見ている。また、他のおばさんが同じように子育てしている様子もまた身近に見ています。そのような経験を日々濃密に生後の10年以上を費やして育てていきます。そこで得られるものは、これは非常に大きな、育児に向けての力ではないかと思います。

**一色：**ここに参加している学生の多くは総合子ども学科の学生です。小さい子どもたちとこれから関わっていく、自分でも子育てをすることからすると、今チンパンジーもいろいろなお兄さん、お姉さんが小さい子どもをどうやってお母さんが育てるかというのを見て、いろいろと学んでいるというお話もありました。そういう意味で皆さん方からチンパンジーの子育てから学ぶということで、質問、意見などありますか。

**学生A：**最初のビデオを観て思ったのですが、チンパンジーの赤ちゃんを人間のお母さんがずっと育てた場合、人間の子どもみたいに育っていくのでしょうか。

**竹下：**非常に微妙な質問だと思います。当たっていると思います。つまり、子どもというのは、生まれて出た文化の中で育つということだろうと思います。いろいろな周囲の人の振る舞いを見て自分自身の行動として身につける、それは、ヒトの社会で育てられるチンパンジーにも同じように作用します。そういう文化の力は、人間の社会文化の力というのは、チンパンジーの赤ちゃんにもある程度は作用して、そして野生の群れで育つとは全く違うチンパンジーになります。よりヒトとコミュニケーションしやすい力を身につけて育っていくということだと言えます。もちろん、だからと言ってヒトになるわけではありません。

**一色：**では、他にありますか。

**学生B：**竹下先生に質問させていただきたいのですが、チンパンジーが子育てする時に、子どもがしていることにあまり興味がないようでしたが、そのようなことをするのは、何か理由があるのですか。

**竹下：**本当になぜでしょう。それは考えなければいけないテーマです。先程、細辻先生がおっしゃったことの中で、ヒトの女性においては、子育てが、自分自身の欲求を持ち込んで、自分自身が達成感を得るために、子育てが使われるようなことがある。つまりそこには、自分自身がという気持ちが入ってくるわけです。そういう自分がという強い気持ちを発信するような育てられ方をチンパンジーのお母さんはされていないことがあるのかと思っています。自分自身がということに慣れてくると、子どもに何を与えようか、子どもにこうしてやろうかという気持ちが強くなってきます。そのような気持ちが強いことと、自分自身がこうしてやりたいという気持ちを強く感じられると相手はどういう存在なのかという問う力も強くなっていくことがあると思います。子どもをどう理解するかということに精力を向けることと、自分自身を強く主張したい気持ち、それを相手にうまく伝えたい欲求が相互に強まってくる、そのような心がヒトのお母さんの生育過程の中で育てられる、このようなところにヒトの心の発達や進化の過程の独自性があるようにと思います。ご質問には、このような

ことの関わりを考えたりもします。少し抽象的になってしまいましたが、とても重要な質問だったと思います。ありがとうございました。

**一色**：長い時間をかけて段々とヒトがそのような部分を強くして、チンパンジーとは違ったようになってきたということでしょうか。

**竹下**：そうです。実際に何かを与えてもらうとそれを相手に返したいと思うし、返した相手はそれをどう思うのかということで、より相手を深く理解したいという気持ち。ヒトはそれを持つように育てられてきたということです。

**一色**：ヒトの歴史も長い間をかけて、変わってきたわけです。ですから、もっとよりよく、ヒトがヒトの子どもを育てて新しい文化を作っていく、そのための一番の要は、子どもを育てていくところから始めないといけないと思いますので、皆さん是非自分の問題として、この問題を考えていって欲しいと思います。

#### 〔休憩〕

**一色**：何かご質問ご発言はございますでしょうか。

**一般A**：長らく障害児教育に携わって参りました。知的障害の養護学校に勤めておりました時に、母親がチンパンジーのテレビを観るととても情けなくなって、観る気がしないとっておられました。その方のお子さんはかなり障害が重くて、養護学校の小学部の1年生に入った時にやっとこれがお母さんだとわかったぐらいの子もさんで、アイちゃん、アユムくん比べると、もっと発達が遅れているわけで、そのお母さんを慰めるのに、テレビに出るチンパンジーというのは、多分、人間でいうと、京都大学や東京大学に入るような優秀なチンパンジーが出ているのであって、もし、チンパンジーの中で知的障害を持っていたら生きていけないのだ、そのようなチンパンジーはたくさんいるのだと言いました。今お母さんが一生懸命に育てていらっしゃるの、ここまで育ててきたというのは、お母さんが人間だから、育てようという気力がすごいからここまで育てたのではないですか。チンパンジーの世界では、そのような重い障害を持ってチンパンジーは生存できないでしょう。神さまがあなただったらこの子を育てることができるのでしょうかと授けられたのではないですかと言ったのですが、チンパンジーの世界でそのような障害を持ったチンパンジーは生存できないのでしょうか。

**竹下**：もちろん、その程度によると思います。今伺いました重症心身障害というような方であれば、そのような障害を持った個体は野生では生まれても生きのびることはできない、お母さんも育てることができないと思います。けれども、京都大学霊長類研究所のアイとアユムが天才とよく言われますが、必ずしもそうではないことも、研究者たちはお互いに了解し合っているところです。アイは、たまたまアフリカから連れてこられて、

日々、人間が熱心にケアをして、コンピュータを使った学習をさせました。アイはたまたま、キーボードを使うことやモニター課題が好きな個体であって、その相性がうまく通じ合って、能力が鍛えられ、向上して、あのようなパフォーマンスを示すことができたということだと思います。ですからアイでなくてもよかった。それが10人に1人現われるのか、100人に1人かはわかりません。アイは、モニター課題が得意なのですが、手を使う課題は不得意です。先程積木を積ませる課題をお見せしましたが、アイはそれをあまり好きではなく、熱心にしないのです。そういった研究の対象としては、優れた姿をあまり見せてくれない。逆にパンというお母さんチンパンジーがいるのですが、パンの方は小さい時からおもちゃを与えて遊ばせるような育て方をしたので、積木も好きだし、お絵かきも好きなのです。そのような実物を操作して、いろいろな物を人間と共有することにおいては、アイよりも高い能力を示してくれることもあります。ですから、天才として有名になったチンパンジーやボノボ、アイとかカンジは確かにある能力は高く育ったのだと思います。ただ、生まれつき特別なチンパンジーやボノボであったかという、決してそうではないだろうということを、直接関わっている研究者たちは感じているようです。

**一色：**それに関連して霊長類研究所にチンパンジーがたくさんいますが、その中で、未熟児で不幸にして早く死んでしまったチンパンジーやチンパンジーの平均的な能力に比べるととても低いチンパンジーはいましたか。

**竹下：**あります。つい最近も障害を持って生まれて、やはりお母さんが育てきれずに人工飼育になった赤ちゃんがいました。すごく大事にケアをして育てたのですが、数年しか生きられませんでした。悲しいことはたくさんあります。でも先程発言された方がお母さんにアドバイスをされたような考え方、つまり、野生であれば、生後数日も経たない間に死んでしまうものが、ヒトが引き取って育てれば何年間も生活できるということは確かにその通りで、まさにそれがヒトの重要な特性です。障害を持っていても、十分にカバーするような支えを与える、だからこそ私たちはそのことを誇りに思わなければならないのだと強く思うところです。そのように明らかにアイ、アユムよりも見た目の能力は発揮できない、でもそういう子どもを大事に育て上げる力を、そのお母さんは持っておられて、それを支える養護学校の先生たちがおられるということが、私たちヒトという種の誇りだと考えればよいと感じました。

**一色：**他の方で、コメントなどございますか。

**一般B：**私は松沢さんに教えてもらったのですが、チンパンジーはチンパン人だと、本当にヒトに近い、ヒトの親戚のようなもので、やはり小さい時から人間社会で育てられたら、自分はヒトだと思っていると思います。自分はチンパン人として育っているわけです。だから知能も同じでも、やはりそのような社会がそれだけ知能を豊富にしていって、そういう人間に近い行動がとれるようになってきたと私は思っているのです。ところが、人間のお母さんには、育てられていないわけです。だから、そういう点に関すると、母親として子どもがしていることを非常に興味を持って、それをいかに一緒に喜んでするかとか、自分の食べるものを与えて育てること

がやはり野生のまま残っているのだと私は思います。だから、そのようなものを与えないのは、やはり昔のDNAに刷り込まれている古い野生の時に、ものが少ないわけですから、自分が食べていかないと自分が死んだら子どもも死にますから、まず自分が食べる。そういうことが本能として埋め込まれているのではないかと思います。そういうことを言えることとして、石があって、石を投げて興味を持ったということでしたが、本当は、その石は、下に台がありますから、胡桃などを割るための道具ですが、それを知らないのです。だから、教える方法がないのです。しかも胡桃も置いていないわけですから。そのようなものを置いておけば、私はそれで子どもを教育するのではないかと思います。そのようなことをもっと実験していただきたいと思います。同時にそのような文化は、女性のチンパンジーの方が文化を伝達しているのです。ある文化を持っているグループは、そこにいるメスのチンパンジーを知っているわけですから。そこから出て行って、他のグループに行った時にその文化を教えるのです。だから、そのようなことから言うと、女性というのはとても文化に対する伝達力も優れているはずなのです。ですから、子どもにも教えていくと私は思っています。それともう一つは、食料がないために与えないということを言いましたが、野生の時は危険が多いわけですから。危険に対してはとても敏感になっていると思います。子どもが危険なことをしようとすれば怒るのです。そうでないと思ったら、無関心でいることではないかと思います。

**竹下：**危険を察知したら干渉するという場面の例としてご紹介しましたが、ご指摘いただきました場面は林原類人猿研究センターで撮影されたもので、ナッツ割りの習得の実験をしているところです。あのように台石を置いて、チェーンをつないだハンマーの石を何台が設置しています。そこでは、大人のチンパンジーたちは、どうやったら割れるのかということを手で習得しているのです。あのビデオでは、ナッツはない状態で、子どもが皆と一緒に遊ぶ場面を撮影したのですが、お母さんとしては、石についてはそんなに危険ではないとわかっている、けれどもチェーンはどうもなんとなく気持ちが悪い、危ないと感じた。だから、そのチェーンを触ると駄目だと思ったようです。チンパンジーが実際に積極的にこれはこうするのだよと子どもに教える、例えばナッツ割りを教えることがあるのか、非常に興味深いテーマであり、それについての研究は、これまで京都大学霊長類研究所でも、林原類人猿研究センターでも行われたのですが、その中で、やはり積極的な教示、こうするのだよとモデルを示したり、子どもの手を取ってこうするのだと教えたりということは、観察できませんでした。野生では数例は観察されています。ですから、先程、口渡しでスプーンを渡しましたというビデオをお見せしましたが、これと同じように教えることが全くないということはない、と言えます。何十時間、何年間観察した中で1例、2例そのようなシーンを見ることができます。けれども、日々の生活の中で、そういった形の教え方、教育をチンパンジーはしません。だから教えてないのかということではなくて、どうやって教えているか。せつせとお母さんがナッツを割る。そのモデルを延々と見せる。熱心に道具を選んで、熱心に食べる。そのことに熱心に取り組むという姿を子どもはお母さんに近づいて、お母さんが一生懸命にやっている姿を傍で見て育つわけです。それが、彼らにとっては、重要な教育方法であるのだと思います。それが彼らの教える姿であって、そういう中から子どもは自ら学んでいく。それがチンパンジーにおいて文化を、世代を超えて伝えていく上で非常に有効な手段になっているのだと思います。

**一色**：本日は遠方からおいでいただいた先生がいらっしゃるので、小久保先生何かございますか。

**小久保**：初めまして。千葉敬愛短期大学の小久保と申します。11月に一色先生のところにお邪魔をいたしまして、子ども学研究センターを立ち上げる経緯などのお話を伺いました。素朴な質問になってしまいますが、私の専門は学校教育の教科教育の国語教育で専門外とはなるのですが、家族の概念、父親が全然出てきていないのですが、やはり人間社会と大きく異なることなのかと思いつつながら、ビデオを見ていたのですが、竹下先生にはチンパンジーの父親の役割、存在、家族というのがどうなのか。細辻先生には、人間社会の家族の父、父性原理、母性原理、今、家族の形態が非常に変わってきて、それが子育てのしにくさに繋がってきているのかとも思いますので、その辺りを伺えればと思うのですが、よろしくお願いします。

**竹下**：チンパンジーにおける父親の役割ですが、チンパンジーは野生の場合は、複雄複雌で数十頭の群れで生活をしています。女性の方がやや多いらしいのですが、ほぼ半々位です。その中での男女関係は、非常に力の強い男性が、一応コントロールしています。つまり自分が、たくさん子孫を残せるように他の男性を牽制して、そのような機会をたくさん持たないようにしているらしいのです。でも圧倒的に占有しているわけではありません。だからいろいろな男性がいろいろな女性と、いろいろな女性がいろいろな男性と交渉を持つことは可能です。というわけで、生まれてきた子は、その群れの男性の誰かの子どもです。ということは、男性側からすると、そこの群れにいる女性から生まれた赤ちゃんたちは、自分が交渉を持った相手から生まれてきた子どもである限りは自分の子どもの可能性があるわけです。しかも、チンパンジーの群れは、女性がよその群れにお嫁入りに行きます。男性は、生まれた群れに残ります。ということなので、結局自分が父親でなくても、自分の兄弟とか従兄など、要するに血縁の者が、生まれた子どもの父親であるので、どちらにしても、生まれた子どもは自分たちにとっては大事な子どもであるのです。ですから、特定の子どもの父親として、特定の子どものケアを引き受けて、がんばって育児するのではなくて、その群れの子ども全体の保護をします。熱心に面倒を見るかどうかは個体差がありますが、基本的には、父親としての役割をその群れに生まれた子どもに対してはどの子に対しても果たします。群れでの父親としての役割は何かというと、腕白に元気に発達してきた子どもが遊びかけてくるので、このようにいろいろと関わり合いを求めてきた子どもを優しく受けとめてやって相手になることでしょうか。それほど熱心に子どもに関わることは一般的にはないのですが、そういう時間をたくさん持つ個体もそれなりにはいるようです。チンパンジーではお父さんはどうなっているのか、という質問がよくありますが、お母さんが圧倒的にワーキングマザーで、母子家庭なのです。家庭という言葉を使用するのは、不適切ですが、お母さんがいて、赤ちゃんがいて、お兄ちゃんがいて、小さい子どもが離乳したら、また引き続いて次の子どもが生まれます。一人の女性が数名、5～6名、あるいは3～4名の子どもを生涯の中で順々に育て上げるということになっています。

**細辻**：今のお話でもありましたように、人間の家族も古くから現在までを通して考えてみると、今はお父さんとお母さんと未婚の子女で核家族ということですが、そのようになってきたのは、歴史の中では、新しい方

で、古い時代は、たとえば、母方の叔父のところ子どもは育つ場合、男からすれば、姉妹の子どもたちを自分の子どものようにして、一族で育てるので、お父さん自体が妻のところへ通っているような形ですが、自分の子どもの世話をしないで、自分の姉妹の子どもの方へずっと関心が向く。そのように系譜がつながっていったので、直接血がつながっている子どもを大事にするという制度ではなかったということが、アフリカなどでは多かったですし、母系でずっと育っていく文化もあるという形で、いろいろな家族の有り様がありました。けれども、今は血のつながり、自分の血を分けた子どもが欲しいということで、養子ではなく、不妊治療をしなくても自分の子どもを作るという時代になっています。

家族の起源を霊長類との共通部分まで遡って、意義を見出すとすれば、それは、メスが子どもを育てている間は、メスに餌を運んであげる役割というか、メスの子どもと血が繋がっているかどうかはわからなくても、危険からメスを守り餌を補給するという機能を果たすオスが必要であって、それは生物学的な父でなくてもかまわないという意義がありました。今は生物学的な父親であるということに重きが置かれていますが、社会的父というのがあって、これは人類が存続していくために、次世代を育て上げるメスを保護するという役割です。但し、役割分業として母親がずっと家にいて、公私を分ける、つまり家の外と中というのを分業ですするというのは、近代家族はそれでやってきたけれども、そういう近代家族の理念は、現代では段々と崩れてきて、新しいモデルに移行している状況です。いわば、父親も母親も両方とも外に出て働いて、自分の好きな仕事をしながら、2人で役割を固定せずに育てるといったことの方が強まってきている。ちょうど今は、過渡期にあるかと思います。

**一色：**他の方で何かありますか。

**一般B：**もう一つありまして、チンパンジーの場合、若いメスザルの子育ての時に、年上のメスザルがちょっかいを出して、子育てに協力するというのを聞いています。また、その若いメスザルが死んだ場合は、その代わりになって育児をしていくと聞いているのですが、そうであれば、一番に社会よりも社会的なヒトがもっとそういうことを地域ぐるみでしていくのが本当ではないかと思います。それが本当にチンパンジーに学ぶ育児だと思えます。

**竹下：**まさにそういうことです。そういうことが重要で、チンパンジーから私たちが学ぶことの意義は、チンパンジーの生活をこと細かに知るだけではなくて、そこから、私たちの特性を知ること。そこに学びの重要な意義があります。私たちが私たちのことを知る上で、チンパンジーは非常に貴重なデータを私たちに示してくれるということです。同時に、私たちが彼らと共有しているものの価値の大きさ、深さをしみじみと感じさせてくれるというか、これだけ長い何百万年の歴史を経て、まだ持っている、そのものの価値に気づかせてくれるということかと思えます。

**一般C：**桃山学院大学の学生相談室の者です。質問は大きく2つあるのですが、一つは、私の専門は臨床心理学ですが、まず、その最近の過保護の親、モンスターペアレンツという言葉がありますが、うちの大学

にもいろいろな親御さんがおられます。学生相談室に相談にくる学生さんの話を聞いていくと、どちらかというと、放りっぱなし、ネグレクトなどの話もあるのですが、最近で多いのは、過保護の親とか、必要以上に関わる、自分の持っていきたい方向に持っていかれている、親のために大学に来ている子どもが多いかと感じます。サルは、先程の映像ですと、見守っているだけで反応は示していませんでしたが、過保護の親ザルがいるのかということです。

**竹下：**一人ひとりのチンパンジーのお母さんで子育てが上手な人もあるし、下手な人もあります。子育て上手の中でも、関わり方の濃密さには、またそれぞれに大きな違い、小さな違いがあるようです。そういう意味では、チンパンジーの中で過保護なお母さんは確かにいます。動物園で集団飼育しているチンパンジーたちを見て、キーパーたちは、あるお母さんがいつまでも離乳させないことなどを日々語りあって、ハラハラしながら見守るようなことがあったりします。ただ、それは、本当に丁寧に育てている、荒っぽくは育ててない、保護的過ぎるお母さんの姿です。それと、ヒトのお母さんが過保護になる、保護を通り越して強制的に強引に導こうとするのとは違います。そういう関わりをする母親のチンパンジーは見たことがありません。チンパンジーの母親が子育てする中にも、自分がこうしたいから子どもにこうして欲しいという場面は、やはり出てきます。例えば、自分はもうここから立ち退いて他に行きたいという場面があります。その時にどうしてもそうしなければ行けなかったならば、子どもを抱き抱えてその場を去るのですが、そろそろ行きたいなと思う程度の必要の場合は、あくまでもやはり促すだけなのです。そういう気配を見せるだけなのです。そして、子どもがそれを察知して行こうと思えば付いてきます。けれども、子どもは子どもで非常に面白いことをしているから、行きたくないということも多くあって、そうなると、中々お母さんに従いません。その時に、お母さんはとにかく行こうという感じで直接触れて促すことをしません。ただ、促しているのは明らかで、本当に子どもの気持ちを尊重した関わり方を丁寧にやります。ヒトの場合は、それにとどまらず、私がこうしたいと思ったことをやはり子どもにこうして欲しいと強く願い、どうしてもそちらの方に向けてしまおうとしがちです。子どもが何をしたいのかを汲む配慮をしつつ、いろいろなものに向けて関心を共有しようとする程度であればまだよいのですが、自分が見ているものに子どもの関心をわざわざ向けさせようと強く働きかけたり、自分が思うように振舞うように仕向けたりするところがヒトの育児においては目立ちやすく、それがヒトのお母さんの大きな落とし穴というか、親子間の深刻な問題を生む源になっていると思います。

チンパンジーと私たちに共有されている基本形は「見守る」ことだと思います。要するに危険からは遠ざけるけれども、そうでないのであれば、子どもは自由に遊ばせる、採食させる。それをただお母さんは見守ればよいし、お母さんはお母さんで自分に必要なこと、栄養補給をするために一生懸命食べる、食べ物を探して、移動する。そこに子どもが付き従ってくるので、子どもをしっかりモニターして見守り続ける。求めてきたら拒否せず与える。そういう迎いが、私たちがチンパンジーと共有する育児の基本形です。その基本形を大事にしつつ、さらにヒトが一步を踏み出したのは、自分がよいと思ったものを示すとか、興味を持っているから、見たらどう?という形の子どもへの何らかの物の与え方、相手の気を惹くような行動です。そこから始まって、「どう?」と言って見せる。「やってみる?」と聞いて、渡す。そして子どもが見たか受けとったかした後はどうしたかを注意深く見続ける。自分と同じようなことに子どもが興味を持ったら、それを喜ぶ。自分と同じような

ことをしたら、「やったね!」と言ってやる。このようなことは、チンパンジーには見られません。なぜならば、そのような育て方、育てられ方をしていないからです。ヒトのお母さんは、そのような育てられ方をして、そして、そのような育て方を子どもにします。それが世代を超えて繰り返されます。何世代も繰り返されるのが、そのヒト的な知性を生む非常に大きな原動力になったろうし、そこに現在のチンパンジーの状況とヒトの状況を分ける大きな原因があったのではないかと考えています。

**一般C**：もう一つは、サルの子育てのビデオを観ていて、先程、一般の方のお話もありましたが、重い障害の子どもさんをお持ちの親御さんだったから、ちょっと劣等感を感じられたかもしれませんが、例えば、子育てにおいて、チンパンジーの子育ての仕方とかそのようなビデオを観せることについては、人間の子育てにおいて何らかの効果を発揮するのかどうなのかその辺りをお願いします。

**竹下**：私自身はチンパンジーの子育てを見る機会も数年間に渡ってありましたので、そのような経験を踏まえると彼女たちの子育てにただただ頭が下がる思いがいたします。決して、子どもを邪険に扱わない、意志を尊重する。そして、暖かい。いつでも抱っこをする。一言でいうと、叱らないということです。それを見るにつけ、本当に頭が下がり、尊敬する気持ちが湧き起ります。そのような思いでいてくださる一般の方も多いのではないかと実感しています。科学的な検証はしておりません。あくまでも印象です。チンパンジーの研究者はチンパンジーが大好きです。それが一つの証しかと思います。ですから、たくさんの方がチンパンジーをより深く知ってくださることによって、彼らのことを非常に大事に思えるし、生活上、人生上のさまざまな側面で、参考にできる事柄をそれなりに引き出していただけるのではないかと感じています。

**一色**：今回の質疑応答はインフォーマルな形で進行しましたが、チンパンジーの子育てを通して、ヒトの子育ての特性、人間の長い文明文化の中でチンパンジーとは違ういろいろなことを編み出してきたことがよくわかりました。その過程で、いい面もあるとともに例えば最近よく言われているモンスターペアレンツとか母親、父親が自分のために子どもをそちらに向かわせていくということが発生しています。それは、子どもの豊かな育ちからいうと、ネガティブではないかと思えます。やはりその辺りをきちんと見極めて、人間の英知で、そして「チンパン人」の英知を借りて、人間の英知を更に研ぎ澄ませることが大事であるかと思いました。本日はどうもありがとうございました。